

鳥獸文陣羽織の服飾美について

宮 田 ナ ヲ

は じ め に

「日本の衣服は、直線裁ちである。」と端的にいわれるが、元禄袖・薙刀袖・舟底袖などにみられるような曲線と直線の構成美に関心をいだくとともに、同様の服飾美を陣羽織（具足羽織）に見出しうるのではないかと考え、一私見を述べる。

I

日本服飾史上比較的特異な存在である陣羽織は、貞丈雑記に、「陣羽織というもの天文などの頃始まりしものか、東山殿の時代の書などには不見」とあり、資料が相当多く現存し、東京国立博物館に蔵されているものは下記の通りである。

陣羽織 一領 紙子 脊に南無妙法蓮華経 大持国大王 大広目天王 大毘沙門天王 大増長天王 種子不動明王 愛染明王 前 八幡大菩薩 大照大神と墨書す 丈 94.8 cm 衿 31.5 cm 桃山時代 16世紀

陣羽織 一領 麻製 茶色 金糸笹縁 裾に綵の如きものを付す 裏なし 丈 74.3 cm 衿 28.7 cm 脊に金の日の丸形の中 八幡大菩薩 慶長2年2月15日と墨書す 桃山時代 16世紀

陣羽織 一領 表白練絹 裏赤平絹 綿入緞子縁取 脊籠字にて摩利支尊と墨書し 中に法華経を書写しあり 前 籠字にて不動明王の種子 愛染明王の種子を墨書し 中に法華経を書写す 丈 81.7 cm 衿 27.2 cm 桃山時代 16世紀

陣羽織 一領 裳付羽織形 表紅縮緬 裏麻 小縁金糸入紅笹縁 襟錦 丈 84.8 cm 衿 22.6 cm 桃山時代 16世紀

陣羽織 一領 童用 白綸子 裏白絹 襟白茶緞子 雲形織出模様 脊丸三葵紋中央下萌黄糸 輪縫模様 裾に山道縫模様及茶綸子山道形切飾縫付 長 51.4 cm 肩丈 26.6 cm 衿 13.3 cm 伝将軍徳川家光幼時着用 江戸時代 17世紀

陣羽織 一領 白葛布地 襟裏赤地穀織紋轡唐草 裏萌黄麻脊紋朱虎杖紋 丈 84.8 cm 衿 24.2 cm 襟巾 7.8 cm 釦掛 江戸時代 18世紀

陣羽織 一領 萌黄羅紗製 襟廻り白綾 金糸笹縁 脊紋黒地金箔稲穂の丸 丈 96.3 cm 衿 79.8 cm 江戸時代 18世紀

陣羽織 一領 緋羅紗 金糸入笹縁 脊紋丸に三雁金白羅紗切付 江戸時代 18世紀

鳥獸文陣羽織の服飾美について

- 陣羽織 一領 白呉綯製 脊紋黒六曜一 胸紋蔦葉 丈 86.9 cm 衿 50 cm 襟巾 8.7 cm
白木綿打胸紐付 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 生絹製茶色襟同 市松模様 胸に乳付 裏紅梅練絹 金糸縫太刀受紫笹縁
丈 75.7 cm 衿 22.6 cm 脊に「菅左衛士介真行」と墨書あり 信州上田城主真
田家臣菅某所用 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 生絹製 茶色襟綸子 市松模様胸紐生絹製茶色 釧掛 裏白練絹 脊金梅
鉢紋金糸縫 太刀受銀糸笹縁 丈 75.2 cm 衿 23.2 cm 信州上田城主真田家臣
菅某所用 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 緋羅紗製 衿 48 cm 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 黒羅紗製 丈 90.2 cm 衿 66 cm 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 黒羅紗製 脊に緋羅紗にて丸に桔梗紋を縫付 裾廻に白麻二引縫付 太刀
受 小縁花文格子燻革 襟裏紺地金襴 前釧掛 瓢形白羅紗に日の丸入れ 丈
80.3 cm 衿 22.7 cm 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 表裏共に白麻製 三所紋付紅交り染裂をもって丸に桔梗紋を縫付 金糸縫
取 丈 77.2 cm 衿 22.7 cm 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 麻製 渋色 襟赤地錦 胸紐同上 釧掛 脊朱蛇の目紋銀糸笹縁 丈
75.7 cm 衿 26.3 cm 徳川幕臣金村家に伝えしもの 江戸時代 18世紀
- 陣羽織 一領 白茶地緞子製梅花模様 脊紋三亀甲黒羅紗切付 裏白唐木綿毘子圧形 裏
裾海松丸を所々に摺込 裏脊黒羅紗三亀甲紋切付笹縁銀地織物袖括萌黄綵平打
後丈 1 m 衿 84.8 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 表黒熊毛製 裏萌黄呉綯 襟廻り黒羅脊板亀甲縫 太刀除白羅脊板亀甲縫
総小縁黒菖蒲草 胸紐黒羅脊板釧黒角 襟見返しに杓車紋白切付 脊隸書五の字
鍍銀の紋を打つ 丈 87.8 cm 衿 52.9 cm 御使番所用 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 萌黄羅紗製 脊紋抱牡丹白羅紗切付 裏薄葡萄色緞子牡丹唐草模様 小縁
金糸入笹縁 胸紐胴に同じ 釧白角 太刀除紫羅紗 丈 87.8 cm 衿 57.5 cm
江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 黒羽二重製 紐白羽二重ニツ折 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 冬季用 表浅黄織物 萌黄及黄の葵唐草織出模様 裏紫縹子 小縁金糸入
萌黄笹縁 脊紋篆書葵字織出し 丈 94.5 cm 衿 55.7 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 麻製紺白鱗形模様 脊紋蕨手の内に沢瀉 長 98.7 cm 衿 24.8 cm 馬乗
47.2 cm 襟巾 7.5 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 白綾地若松立涌模様 襟裏赤地錦紋葵桂 脊に紋紺丸に水 錦韋の菊綴あ
り 釧掛 丈 115.1 cm 衿 24.2 cm 襟巾 7.8 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 夏季用 朽葉紋紗 紋葵唐草 小縁紫笹縁 丈 96.9 cm 衿 54.5 cm 江
戸時代 19世紀

- 陣羽織 一領 紫頭紋紗裾に金砂子散 裏蒔黄麻脊に緋丸打総角をつく 鍔座三重 裏菊小縁 襟太刀受金襴 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 紺地金襴龍の丸に飛雲文 裏及襟更紗 太刀受緋羅紗 小縁麻 脊に緋丸打総角 鍔座三重菊 丈 87.7 cm 衿 30.3 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 表緋羅紗 裏地雲に宝尽龍の丸金襴 前身折返り 裏法螺貝に蜻蛉に螳螂模様金襴 太刀受黄羅紗に紅梅色小星綴糸飾付 紋は白羅紗切付丸に二引紋 丈総長 89.3 cm 身巾肩 51.5 cm 裾 69.6 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 表紫無地呉紹 裏薄茶木綿地に紅・緑・紫・青等にて種々花模様更紗 前身折返りの部分裏は薄茶・茶・緑の縞に更紗 太刀受樺色羅紗 紋 白羅紗切付丸に二引紋 丈 87.2 cm 身巾肩 55.3 cm 裾 72.6 cm 江戸時代 19世紀
- 陣羽織 一領 白生絹雲龍墨画 裏紅練緯 襟茶地蜀紅模様錦 太刀除同錦の上に金糸かがり 丈 79.4 cm 衿 26.6 cm 明智光春所用模造 明治時代 20世紀

以上の陣羽織の素材・文様構成などより、その発生と展開が次のように考えられる。

中世の甲冑の色は、武士の晴衣裳として豪華絢爛のものであり、特に、鍔の緋の色は美しく威儀や趣味をこれに託した。が、戦争の規模拡大、戦闘様式の変化とともに装備の軽装が要求され、華麗な鍔に替るものとして装飾的な陣羽織が用いられるようになった。即ち、ステータス・シンボルであり、武威の表現であった。亦、経文、不動明王・愛染明王の種子などの墨書は、限界状況におかれた人間の情念の表出であり、その具現はヴィジュアルな面の文様構成となったといえるのではないか。他方、紙子・羅紗などの陣羽織よりは、野外における衣服の外衣的機能としての防寒・防雨を目的としたことも考えられる。装飾性、機能性或は両用いずれを目的として使用されるようになったとしても、その当初には、奇抜なデザインのもものが散見できる。即ち、線（直線・曲線の構成）、面、素材及び色彩において規制されない自由さが感じられる。南蛮との接触により服装への影響があったことはいうまでもないが、その目的意識には感覚的なものと精神主義的なものがあった。なお、この点について江馬務氏は、陣羽織着用の動機を、「道服を法体の人が着用したと同様、出陣に際し死を覚悟で仏門に帰し、死後の冥福を祈る心情から同形式の上衣を身につけたことから始まった。」と考察されている。

江戸時代に入り実戦の機会もなくなると、様式化された一種の儀礼服としての外衣となり、造形意欲の斬新さをみることができない。

陣羽織と袴の服装構成と、現在みられるロング・ベストとパンタロンのそれに共通点がみられるのは興味が深い。

II

京都の高台寺は秀吉の正室寧子が、秀吉の歿後落飾して高台院湖月尼と称して秀吉の冥福を祈り余生をおくった寺院であり、日本工芸史上重視されている所謂「高台寺蒔絵」とともに、高台院北政所所用と伝えられる「亀甲花菱文の繡箔の打掛」、秀吉所用と伝える「鳥獸文の陣

羽織」が蔵されている。安土・桃山時代の陣羽織のうちでも比類のない逸品といわれており、現在京都国立博物館蔵の上記の陣羽織を調査する機会をえた。

マテリアルと造形

この鳥獣文陣羽織は、「明の正徳・嘉靖の製にて、万福を降るものでない。」との一部識者の説を太田英蔵氏は否定されている。氏は、京都大学人文科学研究所に寄せられた A. U. Pope., Ph. Ackermann, A Survey of Persian Art の図版中のオランダ ヘーグ市の Thyssen 男の蔵する「絹製綴錦の敷物」(巾 129cm 長さ 197cm) に注目され、輪郭文の相違はあるにしても、輪郭内の織文は全く同文であること及び、安土・桃山時代の南蛮貿易という時代的背景を考慮すれば、この鳥獣文陣羽織は、ペルシャ産であるとの説をたてておられる。

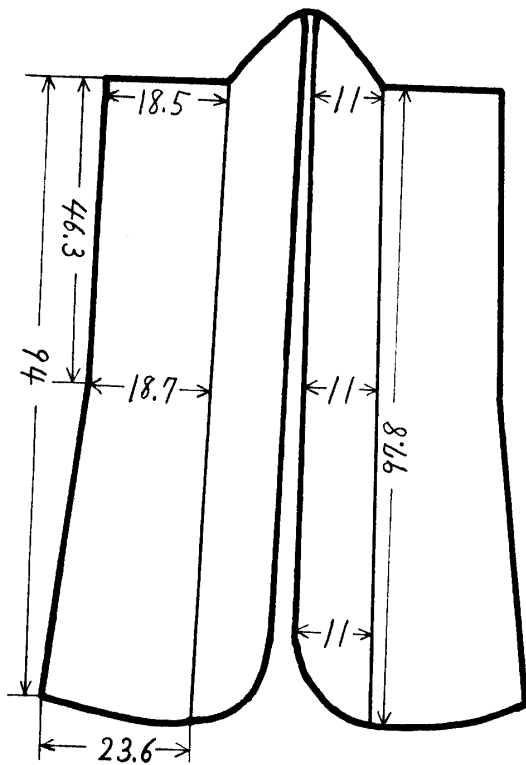
表地は、麻糸を経糸とし、緯糸は彩色糸と、彩色糸に金・銀の平線をまきつけた糸を随所に織り交えた綴錦で、敷物の内文である大小の章文と輪郭部の横帯文が、後身・前身及び衿にたくみに生かされている。即ち、後身頃の上方部は、敷物の内文である大小の章文にて文様構成がなされている。孔雀・龍・豹を中央部に、左右たて列には、大章文の獅鹿闘文と小章文の獅面文が交互に織出され、更に、獅子・虎・走鹿文にて空間をうめ、花果の折枝文が随所に配されて獣文のはげしさが和らげられている。裾より約 20cm の箇所に内文と輪郭部の界線がみられ、この線より下、裾の部分にも走鹿文・孔雀文を織出し花菱文を配して上方部と同様やさしさが加味されている。前身頃は、肩に縫目がなく後身頃に続く文様構成であるが、前身裾には、後身裾にみられる輪郭部の界線がなく、巾広の衿には敷物の輪郭部を用いて表衿側に花菱文があり、衿下部と前身裾の文様の連続性を配慮している。文一つ一つの精巧な構成と面の統一性は、その彩色と相まって華麗さと優美さを感じさせる。なお、この綴錦は、綴錦の特徴であり同時に欠点でもあるところの羽釣孔——彩糸と彩糸の変り目にできる目立たないほどのたての空隙——がでないよう工夫された織り方である。

当時国内で製織された経糸 2 本引き揃いの平絹を用いて総裏とし、袖口及び衿下部の丸み(10cm 強)より前身、後身裾に続く後中央脊割れ——所謂ベンツ——にかけて、金糸を織りこんだ裂にて覆輪を縫いめぐらしてある。平織に金モールを織りこんだこの覆輪——トリミング——の裂は当時日本にはない。同様にトリミングした紐(長さ 12cm 巾 3.5cm)を肩より約 24.5cm の位置につけ、左身頃側のには糸穴——釦ホール——がある。釦は欠損しているが、桃山時代には象牙などの釦が多く使用されていたことから考えると、デリケートなデザインの釦で飾られていたのではないかと推測される。

各部の寸法は図(1・2図)の通りである。(線の煩雑さを避けるため前身・後身別途の図とした。)試着できなかったことは甚だ残念であるが、丈長く巾広い大ぶりの上衣で、この点でも装飾性を意図したことが明らかである。袖口明き留りから脇裾にかけて直線にて約 5cm の裾拡がりとし、ゆるやかなカーブをもたせつつ前下り約 4cm をつけ衿下部の丸みに続く構成線の扱い方は、後身の裾においても同様で、脇より後中心にむけてわづかのカーブで下り(約 2cm)をつけつつ脊割れの丸みに連続する。そしてカーブ線のリズムは紐端(約 1cm の丸み)

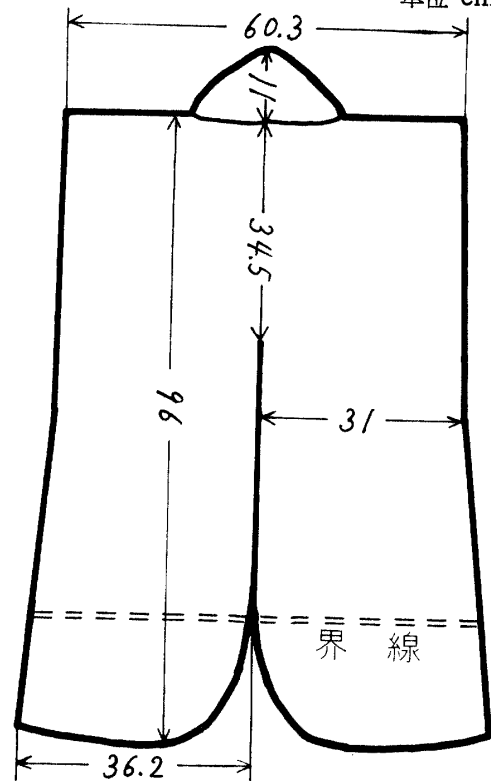
1 図 前身寸法

単位 cm



2 図 後身寸法

単位 cm



において繰返される。肩、袖口、脇及び衿を直線とし、この簡潔・厳格な直線に対して、脇裾より鈍角に、カーブ線より丸みと曲率に変化をもたせ、そして丸みより衿及び後身中央直線へと移行する。更に、前身裾においては、衿を折返して着用することによりカーブ線がリズムカルに反転する。この曲線は、トリミングの材質感とその巾（約 0.7cm）により、強張されすぎることなく上部の直線構成をやわらげ、マテリアルの持ち味に調和している。更に、身丈の長さは、巾の広さと釣り合い（その比1.5強）、わづかの裾拡がりのシルエットはカーブする裾線と相まって、豪華な面にも拘わらず重厚さを与えていない。後身の深い脊割れ（約 60cm）は、着装の際の機能性を発揮するとともに側面からのシルエットが美しく保たれるであろう。左右前身頃章文のシンメトリカルに対しての衿のそれはアシンメトリーであるが、表衿付側に配された内文と輪郭部との間の細縁のたて方向と、前身・衿それぞれの寸法の釣り合いにより全体のバランスがこわされていない。なお、着装された場合、太田氏は具足羽織（具足の上に着用することによりこの名あり。）とされているが、私は小袖の上にも着用されたのではないかと考えたい。そして、具足或は小袖の上に着用された際の袖・裾のマスとのバランスは、文様・色調・構成線により保たれ堂々たる威厳を表出したことであろう。

マテリアル、デザインとも大胆でするどさを感じさせる「小早川秀秋」所用と伝えられる陣羽織（3図）——猩々緋羅紗製 襟廻り牡丹錦 前襟より裾にかけて金入縞織物にて鳥居形を造り胸紐となして釦掛とす 脊紋黒白羅紗にて鎌を切付繡とす 裏白緞子 紺蒔黄にて丸に永

字を繡う 丈 76.6cm 衿 52cm ——

の斜線・曲線・直線の扱い方，特に鋭角に交わる斜線のきびしさと比較し，この鳥獣文陣羽織にはマテリアルの風合を充分計算しつくしたデリケートな心づかいが感得できる。そして伝えられるように秀吉所用という事柄よりも，太田氏が指摘されたように敷物として製織された布を——Thyssen 男の蔵品より約 30cm 長い——材料として選び陣羽織としてデザインした人。当

時の美術工芸品にその作者を知り得ることも多いが，無名の庶民の美意識をも見逃すわけにいかないと思う。

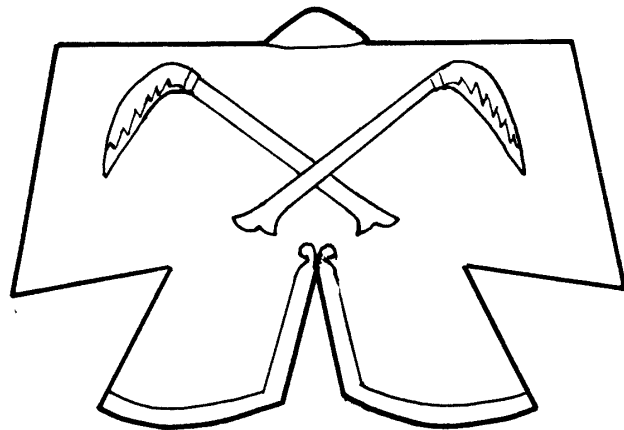
色相について

トリミングの金は美しく保たれているが，彩色系にあらくまきつけられた金と銀の変色が著しい。金・銀のまきつけられていない糸の褪色は比較的少ないとみられる。彩色系と，金・銀のまきつけられたモール風の糸の使いわけをしていることが特徴で，表の「地」と，大・小章文それぞれの「地」に金・銀をまきつけた糸を用い，その中の獣文と，空間をうめる獣文・花果の折枝文を彩色系で織り詰めてある。大・小章文は黒の細線でアラベスクに構成され立体感を与える。用いられている色相を挙げると次の通りである。

Cream	Brilliant yellow	Ochre orange
Rose carmine	Olive drab	Sky blue
Smoke blue	Dark blue	Grayish white

大・小章文の配色美を問題とすることは，金・銀の変色の点を考慮すると正確さを欠くので，別の観点を挙げると，後身の袖口側背部にシンメトリーに配された大章文は，*Grayish brown* 地に *Rose carmine* と *Brilliant yellow* の鬨文であり，前身ほぼ中央に位置するそれは，*Chrome green* 地に *Rose carmine* と *Brilliant yellow* の鬨文であって，脊面・正面それぞれにおいてアクセントになっている。このような配色の変化づけは，小章文(獅面文)においてもみられ同文の繰返しによる単調さを破りリズムを生じる。脊面袖口下動物文の *Rose carmine* は，界線の水平方向に連続する花果の折枝文と相まって裾拡がりのシルエットに効果的である。脊面裾の中心に向って躍動する鹿は，*Ochre orange* 地に *Sky blue* と *Cream*，*Sky blue* 地に *Ochre orange* と *Cream* で，裾のゆるやかなカーブ線と調和しつつ，やさしく，かろやかなトーンである。正面については巾広の衿によって大章文(銀の残存がみられる)も生かされ，*Sky blue* の花菱文がやわらかさを与えている。(註 イタリックの個所は，金・銀をからませた彩色系である。)

3 図



脊 面

裏布の色相は Apricot yellow でつややかである。衣服に「裏」がつけられるようになった動機については、まづ、損傷による補綴が考えられ、次に、前もって二重にすることにより縫代を覆うことができ保温、着やすさを体験した。更に色相数が増すに従って、平安時代にみられる「おめり」のように「表」と「裏」の配色美を意識するようになったのではないか。このように考えると、この陣羽織の裏は、絹の平織であるため着脱が容易であり、着装時の動作により肩先・袖口及び裾の部位において、黒に近い鉄色に金糸の織りこまれた覆輪で画して裏地の配色されるのを予測し、表の MATERIAL の華麗さに調和させた色度といえる。「襲色目」にみられるような色彩感覚・色彩感情の流れをみることができる。

製作技術について

昭和33年に補修されたとのことで、剝落部には Light brownish gray の裂（川島織物製作）が填込まれている。裏布の脊縫をたて、袖口を残して表・裏脇縫を「四ツ縫」とし、衿をつけ、袖口・衿下端（丸み）より前裾・後裾・脊割れの部分を玉縁始末で表・裏布を接合してある。覆輪・笹縁は他の陣羽織にも用いられており、他の衣服類にもみられる縫製技術である。布の損傷を防ぎ、線の明視性を高めるこの技法は、デザイン上のポイントとして、その色、材質及び巾が重視される。色・文様・材質に多様性のあるこの鳥獣文陣羽織の MATERIAL に統一感を与えるトリミング巾であり裂である。又この技法は、表・裏同寸法に裁断された紐の周囲にも用いられている。

やや、「張り」のある芯（白麻の細布）を一枚、衿と紐に入れて型づけ、同様身頃のライニングは、厚地でないこの綴錦の厚さを補ってシルエットを保つ。目的意識の表現——面の拡大と、前述の表・裏の色相対比にアダプトさせた——といえよう。

III

內衣として着用されていた「小袖」が「おもてぎ」となるにともないそのかたちは、袂の発達と相まって現代における「かたち」に定着する。そのプロセスには、染織技術の進歩による素材の多様化、面の装飾表現に著しいものをみることができる。

南蛮との接触刺激により、渡来の MATERIAL を選択し、その色彩、デザインに時代意識を表象させつつ服飾——陣羽織——としてとり入れた面にも「にがりの文化」（註 内藤湖南 日本文化とは何ぞや）をみることができるといえよう。そして、上記小袖におけるような展開をみることなく日本服飾史上の一時期の存在として位置するが、その形態、面の装飾には美意識の流れをみることができると思う。

（1969年9月4日受理）